

【研究論文】

日本語ディベートにおける証拠資料の 「オーソリティー」に関する一考察

張小英
(九州大学)

An Examination of the Authority of Evidence in Japanese Debate

Zhang Xiaoying
(Kyushu University)

本研究は、アンケートとインタビューに基づき、証拠資料の「オーソリティー」に関する中高生ディベーターの意識を明らかにした。その結果、以下の点が導き出された。(1)ディベーターはすべての証拠資料を「オーソリティー」のある情報源から引用しているわけではない。(2)ディベーターは審判に議論として受入れてもらいやすいと考え、たとえ証拠資料の質が低かったり意見に根拠が含まれなかったりしても、証拠資料がないよりは望ましいと考え、試合ではそれを引用している。

キーワード：日本語ディベート、証拠資料、オーソリティー、情報源、信頼性

Key words: Japanese debate, evidence, authority, source, credibility

Debate and Argumentation Education - The Journal of the International Society for Teaching Debate
2019, Vol.2, pp. 28-40.

1.はじめに

コミュニケーション学において、説得コミュニケーション論は重要な位置を示している（鈴木・岡部 2009）。説得コミュニケーションにおいては、証拠資料 (evidence) の重要性が従来より注目されており、その効果についての実証的な研究がこれまでに多数報告されている (Cathcart, 1955; Harte, 1976; Kellermann, 1980; Luchok & McCroskey, 1978; Reinard, 1988)。証拠資料は態度変容 (attitude change) といった効果をもたらすという研究がある (Bostrom & Tucker, 1969; Cathcart, 1955; Harte, 1976; Holtzman, 1966; McCroskey, 1969) 一方、あまり影響がないという結果も示されている (Dresser, 1963; Gilkinson, Paulson, & Sikkink, 1954)。従って、証拠資料が説得的な効果を高めると一概には言えないであろう。しかし、ディベートは「客観的な証拠資料に基づいて論理的に議論をするコミュニケーション形態」（松本 1996、pp. 20-21）である。「主張の内容を重視する教育的ディベートにおいて、情報（データ）は、すべての議論の基礎となり、ゲームの勝敗を大きく左右する」（中沢 1996、p. 50）ものである¹。従って、政策論題を扱う競技ディベートにおいては、証拠資料は必要不可欠だと考えられる²。

¹ 教育（的）ディベート (Academic Debate) という用語は、広く教育目的のディベートを意味する場合、資料の引用を行わない即興型ディベートも含む。本稿では、論題についての資料調査に基づく証拠の引用を重視するディベート（ポリシーディベート・政策ディベート）を対象とする。先行文献中の用語はそのまま用いる。

² 説得的コミュニケーションにおいては、証拠資料は単なる説得効果を促進するための一要因・一手段だと認識されているようであるが、ディベートにおいては証拠資料は議論の基礎であり、議論の内容が共有される一般知識を除けば、提示するのが必要不可欠だと著者は考えている。

ディベートの教科書などの記述では、証拠資料は事実と意見に大別される (Ziegelmueller, 1997 井上監訳 2006; 游, 2004; Ericson, Murphy, & Zeuschner, 1987)。証拠資料の選択や検証の際には、情報源 (source)³ の信頼性 (「オーソリティー」⁴、客観性等) に対する判断が要求されている (Ziegelmueller, Harris, & Bloomingdale, 1995; Inch & Warnick, 2011; O'Neil, Laycock, & Scales, 1917)。Rybacki & Rybacki (2012)、Eisenberg & Ilardo (1980)、Ehninger & Brockriede (1978)、Sayer (1980) などは意見証拠は「オーソリティー」のある情報源から引用する必要があると述べている。一方、一部の教科書は事実証拠と意見証拠の両方について、「オーソリティー」に言及している (例えば、Branham, 1991; Inch & Warnick, 2011)。

ディベートの文字化資料においては、多くの証拠資料は大学教授、憲法、主要新聞 (毎日・読売・朝日) などを「出典」として引用されているが、ジャーナリスト、政党機関紙 (『赤旗』) といったものからの引用も見かける。そして、それらの情報源から意見を引用する際に、その意見が基づく根拠は含まれていないような証拠資料もある。本研究は、今後の日本語ディベートにおいてよりよい議論教育を行っていくために、「オーソリティー」に対する中高生のディベーターの意識を分析し、潜在する問題点を明らかにすることを目的とする。前半では、先行研究に基づき、「オーソリティー」を巡る主要な議論を提示する。後半ではアンケート調査とインタビューの結果に基づき問題を検討する。

2. ディベートの分析視点—Trapp (1993) と Winebrenner (1995)

ディベートを分析する際には、コミュニケーションと議論という2つの概念が最も中心的である (Trapp, 1993)。Trapp は「理論上」と「教育上」という側面から議論的な視点 (argumentative perspective) がより重要であると主張している (p. 26)。すべての議論はレトリック (rhetoric)、弁証法 (dialectic)、ロジック (logic) という視点から分析できる (Wenzail, 2006)。それぞれは以下のように説明されている。

Rhetoric helps us to understand and evaluate arguing as a natural process of persuasive communication; dialectic helps us to understand and evaluate argumentation as a cooperative method for making critical decisions; and logic helps us to understand and evaluate arguments as products people create when they argue (Wenzail, 2006, p. 9).

議論の一種であるディベートには、すべての視点が当てはまるが、Trapp はレトリックでは議論の合理性より説得性が重視されるため、弁証法とロジックのほうがより望ましいと指摘している (p. 28)。その例としてオーソリティーに基づいたエビデンス (authoritative evidence) が挙げられている。前述のように、証拠資料を引用する際に情報源の信頼性を判断する必要があり、教科書でも「オーソリティー」のある情報源が強調されている。これは古代ギリシアの哲学者であるアリストテレスのレトリックまで遡及することができる (Rieke, Sillars, & Peterson, 2013; Inch & Warnick, 2011; McCroskey & Young, 1981)。アリストテレスはロゴス (logos)、パトス (pathos)、エートス (ethos) という3つの説得方法を提示している (鈴木・岡部 2009)。エートスは最も有効的な手法 (Aristotle, Freese trans., 1926) であり、情報源の信頼性 (source credibility) だと見なされている (Winebrenner, 1995; Rieke et al., 2013; Inch & Warnick, 2011; McCroskey & Young, 1981; Andersen & Clevenger, 1963)。

情報源の信頼性は、“an arguer's ability to be believed and trusted by recipients” (Inch & Warnick, 2011, p. 202) であり、“Initial credibility/ extrinsic ethos”⁵ と “derived credibility/ intrinsic ethos”⁶ (Inch & Warnick, 2011; Andersen & Clevenger, 1963) に分けられている。後

³ 情報源とは情報を提供する個人や団体、機関などを指す。

⁴ 本研究では「オーソリティー」を「情報源の専門性・権威性」として定義する。

⁵ “Initial credibility is based on an arguer's credentials, status, and reputation as known to recipients before they hear or read the message.” (Inch & Warnick, 2011, p. 203). “Extrinsic ethos is the image of the speaker as it exists prior to a given speech.” (Andersen & Clevenger, 1963, p. 69).

⁶ “Derived credibility results from what is said in the message—the quality of the claims and evidence used and the ways arguers employ their own expertise to get their claims accepted. Compared with initial credibility, derived credibility depends much more on what the audience thinks about the arguer's claims,

者がアリストテレスの提示したエートスである。つまり、情報源の信頼性は本来情報源が持っている特性（名誉、地位等）ではなく、そのスピーチや使用する証拠資料、議論の文脈などに基づく聴衆の判断によるものと理解できる (Andersen & Clevenger, 1963; Inch & Warnick, 2011; Rieke et al., 2013)。聴衆の価値観、文脈、研究や分析方法によって、情報源の信頼性は必ずしも同じ要素を包含するとは限らない。Rieke et al. (2013) は情報源の信頼性を “competence⁷, trustworthiness, good will, and dynamism” だと考えている。ほかに “expertise”, “trustworthiness” (Sternthal, Phillips, & Dholakia, 1978; Inch & Warnick, 2011; Hovland, Janis, & Helley, 1953; Wiener & Mowen, 1986)、“authoritativeness”, “character” (McCroskey, 1966)、“competence⁸”, “character” (Luchok & McCroskey, 1978)、“qualification⁹”, “safety”, “dynamism” (Berlo, Lemert, & Mertz, 1969-1970) という分類もある¹⁰。先行研究から見れば、「オーソリティー」のある情報源はより信頼性が高いと推測できるであろう。情報源の信頼性が高い場合、証拠資料（根拠）がなくても、情報源の断言 “assertion” が効果的である (McCroskey, 1969; Rieke et al., 2013)。一方、情報源自体の信頼性があまり高くない場合には、その情報源より信頼性が高い情報源から証拠資料を引用するほうが、説得効果が促進される (Luchok & McCroskey, 1978; McCroskey, 1969; Warren, 1969)。従って、多様な専門分野の知識が必要となるディベートの論題において、ディベーターのような専門知識があまり高くない情報源が説得を行う際には、より「オーソリティー」のある情報源から証拠資料を引用すると考えられる¹¹。

Trapp (1993) は、レトリックの観点では、説得的な証拠として、必ず「オーソリティー」に依存する資料が含まれると述べている。そこから、証拠資料の信頼性に関する比較評価が生じ、その連鎖が回復不能な弊害を引き起こしてしまうと論じ、アメリカのアカデミックディベートが論証より説得を重んじるスピーチ学部の伝統の中で発展してきた歴史的偶然を嘆いている。

From that reliance on experts we started down a slippery slope on which we have never regained our traction. The slide began when we assessed evidence from a more credible source as better than evidence from a less credible source. Further down, we assessed evidence from a less credibility source as better than evidence from an unknown source. At the bottom of the slope we evaluate evidence from an unknown source as better than no evidence. Thus, the reliance on evidence based on the opinion of experts was but a short step to the reliance on evidence based on any published opinion. Soon, anything published became “evidence” and the “credibility” of sources lost all meaning. (p. 29)

つまり、現状では、説得を重視するレトリックの視点から、「オーソリティー」のある情報源が重視される結果、情報源の信頼性が相対化され、出版された文献資料を提示できるのであれば、証拠資料がないよりは有利になるとみなされ、ディベートの場で使用されるようになっていくということである。そして、Trapp はディベーターが証拠資料を使用する際に、意見が基づいている根拠や情報源の信頼性を考えずに早いスピードで意見証拠を読み続けていると指

the extent to which they produce counterarguments, and their assessment of the quality of an arguer's evidence.” (Inch & Warnick, 2011, p. 203). “Intrinsicethos, comparable to Aristotle's artistic ethos, is the image derived from elements during the presentation of the speech, consciously or unconsciously provided by the speaker.” (Andersen & Clevenger, 1963, p. 69).

⁷ “Competence” の同義語は “wisdom, sagacity, reliability, authoritativeness, expertise, and qualification” である (p. 142)。

⁸ “Competence” の判断基準は “expert-inexpert; qualified-unqualified; inexperienced-experience; untrained-trained” と挙げられている (p. 377)。

⁹ “Qualification” の判断基準は “trained-untrained; experienced-inexperienced; skilled-unskilled; qualified-unqualified; informed-uninformed” と挙げられている (p. 574)。

¹⁰ それぞれの要素が独立で、または依存しあって説得に影響を与えている。

¹¹ Trapp は情報源の信頼性要素を聴衆から見た “competent”, “trustworthy”, “dynamic” だと挙げており、説得の観点で専門家の意見に頼ること自体は許容されると考えている。その理由は一般の人がすべての分野に精通しているとは限らないし、そして、専門家が基づいた根拠さえ理解できない事柄もあるからである。詳しくは p. 29。

摘している (p. 31)。また、レトリックの観点から議論を分析する際に、「オーソリティー」のある情報源から引用した意見証拠は事実証拠と同等かそれ以上に説得的であるが、議論と証拠の実質を評価するロジックの観点では、事実の方がより有効的であり、止むを得ず意見証拠を利用する場合もその情報源の信頼性と意見が依拠した根拠も問われなければならない (p. 31)。

ディベートの分析視点に関して、もう1つの研究がある。Winebrenner (1995) は証拠資料を“constructive premise”、“authoritative inference”、“conclusionary evidence”に分類し (p. 22)、引用する資料を適切に使用すれば、説得的かつ合理的・論理的な議論が生み出されると語っている (p. 15)。その方法として、彼は証拠資料が事実か意見を問わず、すべて「オーソリティー」のある情報源から引用する必要があると強調し、「オーソリティー」を評価かつ明示することも要求している¹²。“constructive premise”は議論の前提であり、事実証拠に当たる。その信頼性・妥当性 (material validity) は情報源の「オーソリティー」に依拠する (p. 24)。意見証拠の場合、“conclusionary evidence”はアサーションに対応するのに対して、“authoritative inference”には意見が基づいている根拠も含まれる。そして、議論を組み立てるに当たって、意見証拠の両方とも説得者 (arguer) ではなく、情報源に責任を置いている。ただし、“conclusionary evidence”に基づく議論は情報源の「オーソリティー」のみに対する遵守 (deference) のため、ディベートにおいてはこの種の証拠資料が一番弱い。また、“authoritative inference”による議論では意見の根拠も表明されるため、より実質的 (substantive) (p. 22) だということ。従って、証拠資料が事実か意見に関わらず、情報源の「オーソリティー」が重要な役割を占めており、主張を導く際に、「オーソリティー」を明らかに示さなければならないというのが Winebrenner の主旨である。

筆者もレトリックの視点が有用であると主張したい。前述したように、アリストテレスが提示したエートスでは、情報源の信頼性はあくまで聴衆の判断に委ねられる。信頼性の高い情報源は、より説得的な効果があるため、ディベーターは証拠資料の情報源が信頼できるものであると相手側や審判に認めてもらうためには、「オーソリティー」を明確に示さなければならないであろう¹³。そしてレトリックの視点においても証拠資料が意見である場合には、根拠が含まれるのが望ましいという点に言及している。Rieke et al. (2013) は情報源の信頼性を“direct credibility”、“secondary credibility”、“indirect credibility”に分けている (pp.144-146)。注8で示している“derived credibility/ intrinsic ethos”の定義と合わせて考えれば分かるように、エートスはメッセージの実質的な内容をより重視している。つまり、証拠が意見の場合には、証拠資料の情報源の「オーソリティー」を詳しく提示する必要があるだけでなく、主張が基づく根拠も必要だと考えられる。以上のように、ディベートをレトリック、弁証法、ロジックのどの観点からも分析することができる。そして証拠資料を引用する際には、どの視点も情報源の「オーソリティー」と意見が基づく根拠の表示を求めている。

3. ディベートにおける「オーソリティー」による¹⁴議論の許容性

以上で Trapp と Winebrenner の研究を中心に、レトリック、弁証法、ロジックという視点から「オーソリティー」に基づく議論の合理性を説明した。実際、日本のディベート界においても、以前から「オーソリティー」を使った証明について、コーチや審判の間で議論が交わされてきた (JDA-ML¹⁵ダイジェスト版 1996-1997)。

S.Y 氏は、証拠の定義を「主張の信憑性、信頼性を高める役割を果たす、資料、証言、その他一切を指すこと」(JDA:2134) と述べている。そして「知識的制約」、「時間的制約」(JDA:2156) によって、現実社会の議論もディベートにおいても、著者の「オーソリティー」のみに対する信頼によって、つまり、専門家であることを理由に最低限の証明は成立すると主張している。

¹² 詳しくは pp. 20-26 を参照。

¹³ 参加者の間に情報が共有されている場合には読み上げる必要がないかもしれないが、この点に関しては、後のセクションで説明する。

¹⁴ 根拠がない意見、情報源の専門性・権威性のみによる推論である。

¹⁵ JDA-ML の発言者は主にディベートのコーチや審判をしているメンバーである。元のメーリングリストは一般には公開されていなかったが、ダイジェスト版として編集されたものが、日本ディベート協会の旧ホームページで公開されていた。本論文執筆時点では、Internet Archive 収録のものにアクセスできる。

それに対して、H.I氏は証拠のことを「事実や経験則の存否をめぐる議論の客観的根拠」と定義し、それ以外の議論について「根拠を証拠として提出する必要はなく、ディベーターがargumentの根拠を自らの言葉で述べればよい」(JDA:2155)と述べている。同氏は事実に対する証明を含め、専門家の意見・発言を引用する必要はまったくなく、「もし他人の意見を引用するのであれば、その人が客観的な根拠に基づき判断していることを示す必要があります」(JDA:2110)と説明している。そして、ディベートにおいて、実社会での専門家の意見で通用するような議論をしてはいけないと、彼は「オーソリティー」による証明を否定している。また、Y.K氏は議論の妥当性判断を「事実」と「規範」に分け、「ディベートでのアーギュメントの判断は、論理的帰結関係についての諸規範に基いてなされなければならないという前提です」と述べており、一般社会における「議論を行う際の人々の行動・心理についての事実」(JDA:2157)を持ち込むべきでないと強調し、「オーソリティー」のみの証明を否定している。

以上のような論争を見れば、ディベートにおける「オーソリティー」による議論の許容性について、証拠資料の定義、一般社会における議論との関係性といった側面で、審判やコーチの間で意見が分かれている。20年以上たった今現在においては、どのような考え方があるのだろうか。この点に関して、現在のディベート大会の審判やコーチの見解を聞き取った¹⁶。

まずA氏は、「内容によっては専門家としての経験や権威だけである程度評価できることもある」と述べており、専門的な内容に関係する事実に対する主張の場合(例:末期ガンの五年生存率は~年だ)だけ、「オーソリティー」による議論を認めているようである。そして、同氏は「証明したい内容との関係で、誰がどのような資格に基づいて発言していれば説得的と感ずるのか、ということを実質的に考える必要があります」と強調し、必ずしも専門家の発言に依拠する必要がないと主張している。

続いて、B氏は「ディベートは議論の根拠の優劣を論理という基準で競うゲームであり、誰が言ったかよりも何を言ったかを重視することにトレーニングとしての本質がある」と述べている。そして、証拠資料は事実か意見を問わず、すべて専門家から引用する必要がなく、証拠資料は意見の場合に、「どんなに権威があろうと根拠がなければ、それはディベート的には意味のない議論」だと、「オーソリティー」による議論を批判している。一方、C氏は証拠資料は、「ディベーターの主張の重要な部分について、ある程度の客観性を担保するために用いられるものだと考えられます。このことからすると、オーソリティーのない証拠資料は、もはや証拠資料とは呼べないようなにも思われます」と述べており、事実証拠と意見証拠の両方とも「オーソリティー」のあるものから引用することが望ましいと主張している。しかし、「根拠が示されない意見は、オーソリティーの有無に関わらず説得力を欠くものとして受け取るのが通常のジャッジの在り方だろう」と述べ、同氏は「オーソリティー」のみの議論を否定している。同じくD氏も根拠のない意見は説得力が低くなるという見解を示している。同氏は証拠資料が統計など事実の場合に、「権威性といった意味でのオーソリティーがあるとデータ収集の方法等が適切である可能性が上がり、説得力も増すと考えられます。」と述べ、意見の場合には必ずしも権威性が必要でないと論じている。

以上をまとめると、「オーソリティー」による議論の分析視点の差異によって、現在でもディベートの審判やコーチの意見は必ずしも一致しているとは言えないが、議論の論理性・説得性や批判的思考の育成の観点から見て、根拠に基づいたものがより望ましいという考え方は一定の合意に達しているのではないかと考えられる。

4. 証拠資料の「オーソリティー」に対する中高生のディベーターの意識調査

既述したように、レトリックの観点では、「オーソリティー」のある情報源がより信頼性が高いとみなしている。Winebrennerは証拠資料が事実か意見を問わず、すべて「オーソリティー」のある情報源から引用すべきだと主張している。そして、審判の間でも、事実と意見の双方、あるいは事実のみ「オーソリティー」のある情報源から資料を引用する必要があると考えている人もいる。同じくディベートの教科書でも、事実と意見の両方に言及しているものもあれば、意見だけに「オーソリティー」を求めるものもある。一方、Trapp(1993)は、説得性が重視されるレトリックの観点では、「オーソリティー」のある発言がより強調される結果、た

¹⁶長年ディベート甲子園の審判やコーチを務めている4名の方にメールで聞き取り調査を行った。

とえ情報源の信頼性が低くても出版された文献であれば、証拠資料として使えるという現象を指摘している。また、証拠資料が意見の場合に、根拠がなくても専門家の発言に説得的な効果があるという研究はある一方で、Winebrenner は根拠に基づいたものを引用したほうがより望ましいと主張している。ディベートの審判の間にもこのような考えが存在する。

以上の分析結果に基づき、ここでは3つの点を明らかにしたい。現在の日本語ディベート大会において、①証拠資料はすべて「オーソリティー」のある情報源から引用されているのか。② Trapp (1993) が指摘した問題点は存在するのか。③ディベーターは「オーソリティー」のある情報源から意見を引用する際、必ず根拠のあるものを使用しているのか。以上の3点を明らかにするため、中高生のディベーターを対象に、アンケート調査と半構造化インタビューを使用して分析を行っていききたい。

4.1 調査方法

本研究のアンケートとインタビューは2018年8月4日～6日に東京で開催されたディベート甲子園全国大会で実施したものである。大会初日に引率者オリエンテーションで調査の趣旨を直接説明し、アンケートの調査票を配布した。引率者のほか、大会運営委員長に審判の方にも一部を配布してもらった。合計で430部の調査票を配布し、回答数は260部である。うち、有効回答¹⁷は241部（中学生計101名、男性53名、女性48名、経験1年以上65名；高校生計140名、男性82名（高専2名）、女性58名、経験1年以上101名）であり、全体の56%を占めている。また、試合の間に休憩中のディベーターに目的を説明しインタビューに協力してもらった。

4.2 アンケート調査の結果と分析

まず、実施したアンケート調査の結果を提示する（次頁の表1を参照）。次にインタビュー¹⁸の回答を合わせてアンケートの結果に対する分析を行う。

¹⁷ 大学生、院生、引率者、社会人も何名か回答してくれたが、今回は中高生の意識を分析することが目的のため、それらの回答を省いた。そして、未回答の項目が多い回答紙も分析しないことにした。

¹⁸ 本研究で挙げているインタビューの内容はすべて著者本人が文字化したものである。フィーラーなどの言葉を完全に文字化していないが、本人の趣旨を理解するのに支障がないレベルだと考えている。

表 1: 証拠資料使用に関する意識調査

質問項目	回答人数
1) 証拠資料を引用する際に、出典・情報源(情報を提供する人・機関・会社など)が信頼できるかどうかを判断しますか?	計 241
1. 常に判断する	150
2. よく判断する	58
3. 時々判断する	28
4. あまり判断しない	5
5. 全く判断しない	0
2) 出版された文献資料であれば、信頼していますか?	計 240
1. 常にそうしている	68
2. よくそうしている	124
3. 時々そうしている	37
4. あまりそうしていない	9
5. 全くそうしていない	2
3) 引用する資料の出典・情報源の信頼性が低くても、欲しい内容が含まれていれば使用していますか?	計 241
1. 常にそうしている	15
2. よくそうしている	17
3. 時々そうしている	82
4. あまりそうしていない	88
5. 全くそうしていない	39
4) 主張を支持するために、たとえ引用する証拠資料の質が悪くても、証拠資料がないよりいいと思いますか?	計 240
1. 常にそう思う	32
2. よくそう思う	44
3. 時々そう思う	82
4. あまりそう思わない	68
5. 全くそう思わない	14
5) 引用する資料が著者の「意見」の場合、著者が当該領域の専門家かどうか、あるいは権威を持っているかどうかを調べますか?	計 240
1. 常に調べる	113
2. よく調べる	71
3. 時々調べる	36
4. あまり調べない	16
5. 全く調べない	4
6) 引用する証拠資料が著者の「意見」の場合、その理由が述べられているかどうかを調べますか?	計 238
1. 常に調べる	89
2. よく調べる	97
3. 時々調べる	38
4. あまり調べない	12
5. 全く調べない	2

注: 回答者がすべての項目を漏れなく回答したわけでないため、回答人数は必ずしも 241 と一致していない。

4.2.1 情報源の信頼性

検索方法の多様化や技術の発達により、玉石混交の資料が発見できるようになったため、証拠資料を調べる際に、特に情報源の信頼性を判断する必要があると思われる。「エビデンスの情報源は中身の信頼性を左右する」(安藤・田所 2002、p. 90)。そして、著者の「オーソリテーター」が情報源の信頼性と深く関係する(天白 2007; Inch & Warnick, 2011; Ziegelmüller et al, 1995)。表 1 の質問 1 では、出典・情報源の信頼性に関して、241 人のうち「常に調べる」と回答した人数が一番多く、150 人いる。インタビューした結果、生徒は証拠資料を調べる際に、先に情報源を調べてから内容を確認する人もいれば、最初から内容に注目する人もいる。情報源の信頼性に関して、彼らはまず誰が情報を発信したのか、身元が明らかかどうかを見るようにしている。従って、身分が明記されていないブログやウィキペディアの資料は引用してはいけないと生徒ははっきり意識しているようである。しかし、すべての証拠資料が「オーソリテ

ィー」のある情報源から引用されるとは必ずしも言えない。たとえば情報源がジャーナリストの場合に、以下のような考えがある。

ジャーナリストいろんな問題を、こう見てる人っていうのは、やっぱりそれに伴ってある程度、視点が浅くなるというか、そこまで深い分析じゃないけど、でも証拠資料としては、使えるレベルだよねっていう感じのものがあるので、だから、まあジャーナリストはジャーナリストなりのなんか意見みたいなのがあって、じゃこのぐらいのクオリティの資料なのかっていうのは、はい、考えてやってます。(高校生、経験4年)

そして、「質問 2、出版された文献資料であれば信頼していますか？」に対して、回答した240人のうち、「常に信頼している」人が68名、「よく信頼している」人が124名であり、より多くの方が出版された文献資料を信頼しているようである。上記のインタビューの回答と併せて考えれば、証拠資料の情報源はそれほど「オーソリティー」が高くなくても、出版された文献資料で、出典元・発信者の身元が明らかになっていれば、一定の信頼性があるとみなされる傾向にあるため、証拠資料としてそれなりの引用価値があると判断している中高生のディベーターはいると推測できる。

上記の推測を踏まえ、たとえ証拠資料の情報源の信頼性があまり高くなくても使用するという場合もあるのではないかという疑問が湧いてくる。この点に関して、「引用する資料の出典・情報源の信頼性が低くても、欲しい内容が含まれていれば使用していますか」という質問を設定した(質問3)。表1の結果を見る限りでは、使用する人の頻度が異なっているが、「時々使用している」を含めて、より使用する傾向の人(常に使用する・よく使用する・時々使用する人が計114名)と、ほぼ使用していない人(あまり使用しない・まったく使用しない人計127名)とそれほど大きな差がない。同じく、質問4でも「時々そう思う」を含めて、たとえ引用する証拠資料の質が悪くても、証拠資料がないよりよいと思っている傾向がある生徒(158人)はほぼそう思わない人(82名)より多いという結果を示している。

インタビューでは、情報源と内容の信頼性が高くない場合に、まず他により信頼性の高い証拠を探し、もし見つからない場合に、自分たちが立てた論に無理があると反省し、その資料を使わないようにする生徒もいれば、別の考えで使用する人もいる。以下の回答を参照されたい。

ディベートで証拠資料を使ったら、信頼性は上下はあるけど、上から下まであるんですけど、でもまあ一定の根拠としては使えるのかなっていう風にジャッジの人にはおそらく判断してもらえてるんですよ。ただ資料がなくて口頭だけでいうと、あくまで、そのスピーカーの個人の意見じゃないですか。だから他の人がこういう風に言ってるのよっていうのを信頼はできないかもしれないけど、でもあなた一人じゃないんだねっていうことを、まあジャッジに分かってもらうためにも、まあないよりは、あった方がマシなのかなっていう。(高校生、経験4年)

…(自分の言葉でまとめることも)まあできますけど、それをジャッジの方がとってもらえるのかって言ったら、自分の言葉だけなので、やっぱり取ってもらえないんで、まあなるべく控えようとしてます。まあその資料、自分の言葉でまとめるよりは、その質が悪くても公の人が言ってるわけですから、やはりエビデンスとしてはそれは使います。(中学生、経験3年)

インタビューの回答から分かるように、現在の日本語ディベートにおいても、Trappが指摘したような問題点が存在する。つまり、ディベーターは必ずしも証拠資料を情報源の信頼性が高いもの、あるいは「オーソリティー」のあるものから引用していない。彼らは証拠資料があったほうがないより審判に議論として受入れてもらいやすいと信じており、自分の言葉でない公の第三者の発言であれば、証拠資料として使用できると思っているようである。しかし、「エビデンスの存在だけで勝負がついてしまうのではなく、自分のエビデンスの優位性を主張し、相手の不備を指摘するのは、ディベーターの仕事である」(安藤・田所2002、p.85)。そして、「いかに内容が優れていても、その出典が信用できない場合は、証拠資料として信用す

ることは難しくなります」(天白 2007、2.2 証明力, §2 信憑性, para1) という指摘もある。従って、証拠資料を使用する際に、形式的に証拠資料をつけるのではなく、情報源と内容の質にもっと注目すべきだと考えられる。

4.2.2 情報源の「オーソリティー」

情報源の信頼性を示す基準の1つとなる「オーソリティー」を判断するにあたって、Eisenberg & Liardo (1980) は質問の形で7つの項目を提示している。それぞれ、(a) Exactly what are the authority's credentials? (b) Where and how were the authority's credentials earned? (c) When were the authority's credentials earned? (d) What's the authority's reputation among his peer? (e) What's the nature and extent of the authority's published works? (f) Does the authority have any practical experience in his field? (g) Is the authority relatively objectively and impartial? (pp. 46-47) である。そして、エートスの構成要素に関する先行研究では、「オーソリティー」の判断尺度に“trained-untrained; experienced-inexperienced; skilled-unskilled; qualified-unqualified; informed-uninformed”が含まれている。つまり、情報源の「オーソリティー」を判断する際に、情報を提供するものの専門性、スキル、経験、情報への精通度、客観性、資格(取得年号、経由など)、同じ分野からの評価などが参照のポイントになるという。

ディベートでは、どのような情報源から資料を引用するかについて、選手の中での共通認識はある。生徒の話によると、大学教授の発言はかなり信頼され、引用されているという。ほかに、国が出したもの、新聞社なども同様である。実際 JDA ディベート大会、YouTube で公開されたディベート甲子園決勝戦の動画を見れば分かるように、大学のランキングを問わず、そこに所属する教授の発言が多数引用されている。これに関して、意見証拠の場合に、著者の専門性・権威性を判断するかという設問で尋ねた結果、240人のうち、113名が「常に調べる」と回答した(表1, 質問5)。

上記文献で言及している「オーソリティー」の判断項目に従い、教授の発言を引用する際に、少なくとも、教授の専門、今までの研究分野なども考慮する必要があると思われるが、インタビューでは、「教授のプロフィールと研究を見る」との回答がある一方、「まったく見ない」とはっきり回答した人もいる。他に、以下のような意見もある。

誰が言ってるかっていうのが多分、一番その信頼できるか否かっていうことに関係してくると思うんで、資料を引用する前に、あ、大学教授が言ったんだなっていうことが例えば、そういうことがあれば、信頼は、はいできると思います。(高校生、経験4年)

大学教授っていう方々は、論文っていう形で研究成果を出しているわけじゃないんですか。なんだから、自分が言いたいことを言ってるわけで、そういうものって、論文になったら、やっぱり根拠となるデータとかっていうのがたくさんあると思います。だから論文になってる時点である程度の信ぴょう性は確保されているか…。(高校生、経験2年)

以上のように、試合の前あるいは試合中に、教授の名前を見たり聞いたりした瞬間、信頼できると考えている生徒がいると推測できる。ディベート甲子園の動画を見れば分かるように、彼らは教授の「オーソリティー」を読み上げる際に、専門ではなく、「〇〇大学教授」としか示していない。しかし、これは必ずしもその教授の専門と発言がよく調査され、共有されているからそのように提示されているのではない。

ディベートでは地区大会と全国大会で議論を重ねていくうちに、選手が使用する資料に共有されているものも多くなるようである。実際同じ地区の場合、または、論題によってメリットとデメリットが限られている場合に、議論や証拠資料の内容、そして、どこの情報源から資料を引用するかはある程度予測できると説明している生徒がいる。従って、教授の専門や研究内容をよく調査し、かつ、その教授の発言がディベート参加者の間で共有されている場合に、試合の時間が限られているため、「〇〇大学教授」と表示するだけでも十分であると考えられる。一方、ディベーターが提示した議論に対し勝敗を決める審判は必ずしも著者の専門などが分か

るとは限らないため、毎試合提示する必要があるとも考えられる¹⁹。また、著者の専門性の情報は一般に共有されている情報ではなく、ディベーターが論証責任を果たすためには、新たに議論の一部として提出すべき新情報であるとも考えられる。実際地区や論題によって議論の立て方が異なるため、相手側はどのような議論を出してくるか、どこから資料を引用するか予測できないと語っている選手もいる。このような場合に、情報源の「オーソリティー」を確認すると思われるが、彼らは資料の内容がよほどひどいものでない限り、質疑応答では基本情報源の「オーソリティー」を確認しないとしている。また、「証拠資料の信ぴょう性が欠けてたとしても、そこでしか勝負しかできないんだったら」（中学生、経験1年2ヶ月）質疑や反駁で指摘するという回答もある。

以上のように、試合時間が限られているディベート大会では、情報源の「オーソリティー」や信憑性はどうしてもこの次だと考えられているようである。しかし、証拠資料は議論の基礎であり、情報源の「オーソリティー」は証拠資料の中身の質とも関係しているため、中高生や審判は情報源の「オーソリティー」をすべて詳しく調査していないこと、相手側の資料の情報源も予測できない場合があることを考慮すれば、出典を読み上げる際に「オーソリティー」を明確に示すべきだと思える。複数のディベート教科書でも「オーソリティー」の明示を奨励している (Inch & Warnick, 2011; Branham, 1991; Ziegelmueller et al, 1995 など)。

前述したエートスの概念について、アリストテレスが強調した情報源の信頼性は、説得の前に聴衆が情報源に対して抱くイメージではなく、説得のスピーチやメッセージにおいて、情報源の専門性や経験を聴衆にアピールしたり、証拠資料や合理的な推論を聴衆に示すことによって、効果的な役割を果たす。つまり、教授という肩書きがあるから一概に信頼できると判断するのではなく、著者の今までの経験・経歴や研究分野を調査し、論題の存在領域や論点とどのような関係があるかを考慮するとともに、明確に審判や相手側に「オーソリティー」を示す必要があると理解できる。

4.2.3 「オーソリティー」による議論

引用する証拠資料が著者の「意見」の場合、その理由は述べられているかについて、表1の質問6を見る限りでは、たとえ証拠資料は専門家の意見だとしても、中高生は根拠が含まれる資料を利用すると推測できるであろう。実際、専門家の意見に関して、以下のように考えている生徒はいる。

…（専門家の意見だから根拠がなくても信頼していい）という分もありますし、なんかその資料だけじゃなくて、同じような意見を言ってる人で、根拠をつけてるところを引用してからその人の意見を引用したりとか、なんか一枚の資料だけじゃなくて、二枚とか、3枚とかを入れて、なんか立証を尽くしてます。（高校生、経験4年）

根拠が書いてあった方がいいんですけど、根拠が書いてあるのがない時はもう根拠がないままいってしまう感じですね。…（審判に指摘されるのは）それも分かってますけど、それでも使える資料が限られてるんで、それでもそれを反駁に使わないよりはマシだから、その、理由のない意見をまだ言う方がマシだから。（中学生、経験2.4年）

使う場所によります。立論中で、あ、ここが潰されたら嫌だなんて思うところは根拠がない資料は別の資料を探そうかなと思うんですが、正直どうでもいいところでとりあえず資料をつけとかなくちゃいけないみたいな、なんか相手を釣るための場所とかには、その資料かに探す時間とか、めんどくさいなと思ってその資料を使ったりはします。（中学生、経験2年）

¹⁹ JDA2019 春季大会の主審が講評で審判の知識量とディベーターの知識量が異なることを問題にしている。詳しくは以下参照。<https://www.dropbox.com/sh/vnin279zit6zr71/AADqo4Bytbhpc3dKNuzNjK2a?dl=0&fbclid=IwAR0XweOO9IH6DfBsDOuheYCTFaqlvYP8GAQ5zxi9cRyC19EBP9xDXhhgJo8&preview=%E4%B8%BB%E5%AF%A9%E8%AC%9B%E8%A9%95.MP3>

まず、意見のみの証拠に対して、その資料を諦めたり、補強するために他に意見が同じで根拠が含まれている資料を探す生徒はいる一方、専門家の意見に根拠が含まれていなくてもそのまま使用する人もいる。その理由としては、専門家の「オーソリティー」に対する信頼を反映しているとともに、前述した証拠資料がないよりいいという考えも挙げられる。他に、勝つための戦略として使用している生徒もいる。ゲーム性のある競技ディベートにおいて、勝利を目的とする際にどうしてもこのようなことが起きるのであろう。「信頼性の点では、専門家の意見が勝っているといえるが、専門家の中でも、見解に相違があることもある。エビデンスとして重要なのは、その意見についての裏付けや理由が述べられているかということである。この理由付けがない限り、エビデンスとしての価値は低くなってしまおう」という指摘もある（安藤・田所 2002、p. 90）。従って、専門家の意見を引用する際にも、根拠が含まれる証拠資料がより望ましいと思われる。

5. おわりに

本研究はディベートの分析視点、審判やコーチの考え方をめぐり、アンケートとインタビューによって、情報源の「オーソリティー」に対する中高生の意識を分析した。教科書や先行研究では「オーソリティー」のある情報源から資料を引用する必要があると示しており、著者の「オーソリティー」を判断する際に、専門性、スキル、経験・経歴、情報への精通度、資格（取得の年号、経由など）、同じ分野からの評価などを考慮する必要があると書かれているが、中高生は必ずしもそのようにしているとは限らない。彼らはある程度出所がはっきりしている出版された文献資料であれば、証拠資料として、それなりの使用価値があると考えているようである。その他、試合で審判に議論として受入れてもらうために、証拠資料がないよりはあったほうが望ましいと考え、たとえ情報源や内容の信頼性が低くても使用している生徒もいる。また、彼らはより「オーソリティー」のある証拠として、大学教授の発言をよく引用しているが、必ずしもその教授の専門や研究分野を調査するわけではない。しかも専門家から意見を引用する場合にたとえ根拠が述べられていなくても使用している生徒がいる。

本研究は、少数の学校の生徒しかインタビューしていないため、すべてのディベーターに当てはめることは慎むべきだと思われる。そして、証拠資料の定義・意義に対する審判の姿勢、またそれに対する判定方法を今後の課題にしたい。

参考文献

- 安藤 香織・田所 真生子（編）（2002）. 実践アカデミック・ディベート:批判的思考力を鍛える ナカニシヤ出版
- 松本 茂（1996）. 頭を鍛えるディベート入門—発想と表現の技法— 講談社
- 中沢 美依（1996）. 教育的ディベート授業入門 明治図書出版
- 鈴木 健・岡部 朗一（編）（2009）. 説得コミュニケーション論を学ぶ人のために 世界思想社
- 天白 達也（2007）. 証拠資料についての総論的考察 初心者のディベーターを救う団・公式ホームページ Retrieved from <http://sdsdann.web.fc2.com/souten/souten-evidence1.html> (2018年8月25日)
- Andersen, K., & Clevenger, T. (1963). A summary of experimental research in ethos. *Speech Monographs*, 30(2), 59–78.
- Aristotle. (1926). *The "art" of rhetoric*. (Freese, J. H., trans.). Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Berlo, D. K., Lemert, J.B., & Mertz, R.J. (Winter, 1996-1997). Dimensions for evaluating the acceptability of message source. *The Public Opinion Quarterly*, 33, 563-576.
- Bostrom, R. N., & Tucker, R. K. (1969). Evidence, personality, and attitude change. *Speech Monographs*, 36(1), 22–27.
- Branham, R. J. (1991). *Debate and critical analysis: The harmony of conflict*. Hillsdale, N.J: L. Erlbaum Associates.
- Cathcart, R. S. (1955). An experimental study of the relative effectiveness of four methods of presenting evidence. *Speech Monographs*, 22(3), 227–233.

- Dresser, W. R. (1963). Effects of “satisfactory” and “unsatisfactory” evidence in a speech of advocacy. *Speech Monographs*, 30(3), 302–306.
- Ehninger, D., & Brockriede, W. (1978). *Decision by debate* (2nd ed.). New York: Harper & Row.
- Eisenberg, A. M., & Ilardo, J. A. (1980). *Argument: A guide to formal and informal debate* (2nd ed.). Englewood Cliffs, N.J: Prentice-Hall.
- Ericson, J. M., Murphy, J. J., & Zeuschner, R. B. (1987). *The debater's guide* (revised ed.). Carbondale, IL: Southern Illinois University Press.
- Gilkinson, H., Paulson, S. F., & Sikkink, D. E. (1954). Effects of order and authority in an argumentative speech. *Quarterly Journal of Speech*, 40(2), 183–192.
- Harte, T. B. (1976). The effects of evidence in persuasive communication. *Central States Speech Journal*, 27(1), 42–46.
- Holtzman, P. D. (1966). Confirmation of ethos as a confounding element in communication research. *Speech Monographs*, 33(4), 464–466.
- Hovland, C., Janis, I., & Kelley, H. (1953). *Communication and persuasion*. New Haven: Yale University Press.
- Inch, E. S., & Warnick, B. (2011). *Critical thinking and communication: The use of reason in argument* (6th ed.). Boston, Mass: Allyn & Bacon.
- Kellermann, K. (1980). The Concept of Evidence: A Critical Review. *Argumentation and Advocacy*, 16(3), 159–172.
- Luchok, J. A., & McCroskey, J. C. (1978). The effect of quality of evidence on attitude change and source credibility. *Southern Speech Communication Journal*, 43(4), 371–383.
- McCroskey, J. C. (1966). Scales for the measurement of ethos. *Speech Monographs*, 33, 65–72.
- McCroskey, J. C. (1969). A summary of experimental research on the effects of evidence in persuasive communication. *Quarterly Journal of Speech*, 55(2), 169–176.
- McCroskey, J. C., & Young, T. J. (1981). Ethos and credibility: The construct and its measurement after three decades. *Central States Speech Journal*, 32(1), 24–34.
- O’Neil, J. M., Laycock, C., & Scales, R. L. (1917). *Argumentation and Debate*. New York: Macmillan.
- Reinard, J. C. (1988). The empirical study of the persuasive effects of evidence: The status after fifty years of research. *Human Communication Research*, 15(1), 3–59.
- Rieke, R. D., Sillars, M. O., & Peterson, T. R. (2013). *Argumentation and critical decision making* (8th ed.). Boston, United States: Pearson.
- Rybacki, K. C., & Rybacki, D. J. (2012). *Advocacy and opposition: An introduction to argumentation* (7th ed.). Boston: Allyn and Bacon.
- Sayer, J. E. (1980). *Argumentation and debate: Principles and applications*. Sherman Oaks, CA: Alfred.
- Sternthal, B., Phillips, L., & Dholakia, R. (1978). The persuasive effect of source credibility: A situational analysis. *Public Opinion Quarterly*, 42, 285–314.
- Trapp, R. (1993). The need for an argumentative perspective for academic debate. *CEDA Yearbook*, 14, 23–33.
- Warren, I. D. (1969). The effect of credibility in sources of testimony on audience attitudes toward speaker and message. *Speech Monographs*, 36(4), 456–458.
- Wenzel, J. (2006). Three perspectives on argument: Rhetoric, dialectic, logic. In Trapp, R., & Schuetz, J. (Eds.), *Perspectives on argumentation: essays in honor of Wayne Brockriede* (pp. 9–26). New York: Idebate Press. (Original: 1990, Prospect Heights, ILL: Waveland Press.)
- Wiener, J. L., & Mowen, J. C. (1986). Source credibility: On the independent effects of trust and expertise. *Advances in Consumer Research*, 13, 306–310.
- Winebrenner, T. C. (1995). Authority as argument in academic debate. *Contemporary Argumentation and Debate*, 16, 14–29.
- 游梓翔 (2004). 認識辯論 雙葉書廊
- Ziegelmueller, G., Harris, S., & Bloomingdale, D. (1995). *Advancing in debate: Skills & concepts*. Topeka, KS: Clark Publishing.

Ziegelmüller, G. W., & Kay, J. (1997) *Argumentation: Inquiry & Advocacy 3rd ed.* Boston: Allyn & Bacon. (ジーゲールミュラー, G.W. 井上 奈良彦 (監訳) (2006). 議論法 : 探求と弁論 花書院)

「authority を使った証明について」 (1996-1997) JDA-ML ダイジェスト版 (日本ディベート協会) Retrieved from <https://web.archive.org/web/20061004111231/http://www.kt.rim.or.jp/~jda/JDA-ML/ml-auth.htm> (2018年8月25日)